

私の子宮を
みんなで一緒に
使うのは無理よ!!

霊母巫女
苦悶超拡張姦

CGイラスト付きサウンドノベル 拡張堂

(第一章…ブログ)

……都会の喧騒から離れて郊外に足を向けると、意外にも多くの自然が残されていることに気づくはずだ。商用ビルやマンションの間、住宅街の一面、旧家の敷地、あるいは公共の施設に溶け込むようにして、木々が生い茂る小さな森林や、長らく人の手が入っていない竹林が、ひっそりと、だがしっかりと、地域に根付き、まるで浮島のように点在している。そのような緑の浮島に隠れるようにして、その廃墟は無惨な状態を晒していた。

建物の壁面には蔓や蔦が生い茂り、窓ガラスは全て割れ、内部には壊れたベッドや機器、器具などが散乱したまま放置されている。敷地内には不法投棄されたと思われる粗大ゴミの姿も見受けられた。この朽ちるに任された廃墟の入り口には、擦れた文字で大きく「和田産婦人科医院」と書かれた看板が掲げられていた。

その名が示す通り、ここはかつて産婦人科の病院だった。病床数は二四。院長を務めていた人物は和田和弘といって、一五年ほど前にテレビや新聞でその名前が大きく取り上げられたことがある。「鬼畜」や「悪魔の所業」といった代名詞を付けられて。

和田産婦人科医院では、その名が示す通り、婦人科検診やがん検診、不妊症治療、出産、人工妊娠中絶などの医療行為を取り扱っていたが、院長が特に力を入れて取り組んでいたのが最後の項目の人工妊娠中絶であった。

院長の和田和弘は、常々、

「望まぬ妊娠は女性の人生を不幸にする」

と云ってはばかりで、その信念を貫くように、中絶や堕胎に心血を注いできた。

実際、日本には望まぬ妊娠をして苦しむ女性が多い。性産業に従事する者だけでなく、性的な知識が乏しい未成年者による性行為、男女の関係を伴った不倫、レイプや性犯罪、経済的な困窮、果ては家庭内での性的虐待の末、望まないのに妊娠してしまったり、望んでいても立ち行かなくなってしまうたりして、妊娠中絶を選択する女性が多い。ゆえに、和田院長の口癖は決定的な言動とはいえないが、だからと言って決められた「ルール」を破っていいはずがない。

人工妊娠中絶に関して、日本には法律で決められたルールがきちんと存在している。一週以上の死胎は墓地埋葬法の規定に則って火葬や埋葬されなければならないとか、人工妊娠中絶がおこなえる期間は二二週未満でそれ以上だと出来ないとか、人工妊娠中絶がおこなえる医療者は母胎保護法指定医のみとかがそれだ。中絶は殺人だとか、日本は中絶先進国だとか、いろいろな批判はあるにせよ、日本における人工妊娠中絶は、きちんとした「ルール」に則っておこなわれている。しかし、和田和弘は、自らの信念のため、その「ルール」を破って治療にあたっていたのだった。

事件の発覚は、同医院で発生した医療事故に端を発する。和田産婦人科医院で中絶手術を受けた一四歳の少女が術後に容態が急変して亡くなったのだ。未成年者が中絶手術を受ける場合には、必ず親の同意が必要となる。しかし、亡くなった少女は書類を偽造していた。医院側はそのことに気づいていたのだが、少女の気持ちを尊重して気づかない振りを

した。手術が成功すればそれでよかったはずだが、不幸にも失敗してしまった。そこで両親は初めて娘の妊娠と中絶のことを知り、怒り狂って警察に告発したという次第であった。警察の捜査によると、和田産婦人科医院では、二二週を超えた段階での中絶が日常のおこなわれていただけでなく、一二週を超えた母親の胎内で死んだ赤子を医療廃棄物として処理したり、自然出産でもダウン症などの障害をもって生まれてきた赤子の「殺処理」が平然とおこなっていたそう。珍しい障害をもって生まれてきた赤子は「標本」としてホルマリン漬けにして保管されており、海外の医療機関に売却された物まであったというから恐ろしい。警察が押収した膨大な量のカルテを精査した結果、和田産婦人科医院でおこなわれていた中絶の件数は五八一件で、その内、違法な中絶行為は二五五件に及んだ。逮捕された和田院長は、警察の取り調べに対して、

「自分は困っていた女性を助けただけだ。私が間違っているのではなく、日本の法律が間違っているんだ！」

と力説し、裁判でそのことを訴えると思惑していたが、結局、それは叶わなかった。逮捕されてから一ヶ月半後、弁護士の実腕によって保釈請求が受理され、保釈金八〇〇万円を納めたことが確認された直後、拘留所で胸の苦しみを訴え、そのまま亡くなってしまったからだ。死因は心筋梗塞であったが、世間では院長の死を流産・墮胎した胎児の霊、「水子の祟り」だと言って話題を集めた。

図らずも和田院長がこの世を去ると、世間の耳目は和田産婦人科医院の元患者に集まることになった。腐ったジャーナリズムに、フライバイシーの保護などという良心があるはずもなく、記者たちは何処からか入手したリストを元に、嫌がる患者たちに取材をしまわった。

患者たちの多くは取材を拒否したが、中には悲劇のヒロインを気取って涙ながらに語る者もあり、とある女性には、ハンカチで零れ落ちる涙を拭いながら、

「あんな鬼畜に殺されたかと思うと、子どもが……子どもが本当に可哀想で……できるなら、この手で抱きしめてあげたいです……」

と悲傷に語ったものだが、そもそも、中絶を望んだ自身の行為を棚に上げてこの発言は、殺人犯が道具を責めるのと同じ論理であり、発言した女性はネット上で個人情報晒され、激しいパッシングを浴びた挙句、ほどなくして務めていた会社を退職する羽目になった。

和田産婦人科医院の事件は、和田院長の死後もしばらくの間、世間の注目と耳目を集めたが、日々と発生する膨大な量のニュースに埋もれ、やがて多くの人々の記憶から抹消されていった。閉鎖された和田産婦人科医院も朽ちるに任せ、時間の経過と共に廃墟と化していった。

和田産婦人科医院跡地の所有権は和田院長の死後、その妻に移っていたが、妻も事件から三年後に心労が原因で命を落とすと、紆余曲折を経て、とある土地開発業者の手に渡った。土地開発業者は廃墟と化した病院を壊し、敷地を整備して新興住宅地を開発する計画

を立てたが、その計画はほどなくして頓挫することになる。廃病院を壊そうとしたところ、関係者が原因不明の苦しみを訴え、次々と倒れていったのだ。

土地開発業者はこれを病院で殺された水子の祟りだと考え、とある人物に除霊を依頼することにした。その人物とは、若い女性でありながら、凄腕除霊師として活躍中の水樹真加奈であった。

彼女は霊と対話することでその苦しみを取り除き、これまでに数多くのさ迷える魂を浄土へと導いてきた実績を持つという。それだけなら胡散臭いベテナ師でもできることだが、彼女の實力が本物だといわれる由縁は、霊との対話によって、未解決とされていた事件を幾つも解決してきた実績があるからである。「松本一家五人殺害事件」「鹿児島母子殺害事件」「沖縄女子高生殺害事件」「盛岡高校生ひき逃げ事件」など、いずれも犯人が捕まらず、未解決のまま放置されていたこれらの事件を、真加奈は霊と対話することによって犯人を探し出し、解決したのだ。世間は彼女のことを大きく報じ、驚きをもって伝えたが、真加奈が有名人となった理由はそれだけではなかった。

端麗な容姿は女優顔負けの美貌で、手足に無駄な肉が一切付着していないにも関わらず、臀部は安産型で肉付きがよく、バストは推定一二五センチXカップはあろうかという豊満さを誇っていた。若いながら母性をも感じさせる、蟲惑的な色香を醸し出す肉体が、世の異性のみならず、同性をも惹きつけたと言って過言ではなかった。

世間一般の関心は、彼女の霊能力よりも、むしろ肉体的魅力に対しての方が高かったといえる。ネットには非公式な彼女のファンクラブが幾つも立ち上げられたし、盗み撮りした彼女の写真を掲載するサイトすらあった。とある出版社などは彼女の水着写真集を出すために、数千万円を用意してオフアールしたほどであったが、これは残念なことに契約にはいたらなかった。

世俗に疎いことも理由のひとつであろうが、真加奈はさ迷える魂を救うことに喜びを感じているようで、金銭的な欲求よりもむしろ霊の苦しみを救うことにこそ自分の存在意義を見い出しているようであった。

そんな彼女だからこそ、土地開発業者から和田産婦人科医院の除霊依頼がきた時、ふたつ返事で了承したのであった。

しかし、まさかこの依頼が、彼女にとっては地獄からの招待状になろうとは、この時はまだ知る由もなかった。

（第二章…水子との遭遇）

……土地開発業者の依頼を受け、真加奈が廃墟と化した和田産婦人科医院を訪れたのは、まだ暑さが残る夏の終わり頃であった。一応、開発業者の社員も付き添っての訪問であったが、敷地をまたぎ、廃墟の中へと入っていったのは真加奈ひとりであった。

「ここから先はわたしがひとりで赴きます。その方がきつと、霊たちも安心して話してくれるでしょうから」

というわけで、ひとりで廃墟へと足を踏み入れた真加奈は、その霊感が導くまま歩を進め、地上から地下へと通じる階段を降りていった。まだ外は明るいとはいえ、電気が通っていない地下空間は薄暗く、陳腐な言い方をすれば一寸先は闇の世界であった。

しかし、霊感が発達している彼女は、視覚よりもむしろ感覚だけを頼りに、確かな足取りで歩を進め、散乱している障害物を避けながら、地下の奥へ奥へと進んでいった。そして、辿りついたその先は、地下に隠された手術室の跡地であった。

「……ここに、みんないるのね」

真加奈は知る由もなかったが、この地下室は、かつての和田和弘の実験室兼、隠れ手術室であった。世間を騒がせた人工妊娠中絶もここで行われた。中絶された胎児たちの遺体や、ホルマリン漬けにされた障がい児たちの標本もこの場所に保管されていたのだ。この地下室に、多くの霊たちがいることを察した真加奈は、暗闇の中に向かって優しい口調で語りかけた。

「ねえ、お話をしましょう。大丈夫、怖くないから、姿を現して」

真加奈の声には霊的な力が込められており、薄暗い地下室の中によく響き渡った。

その声に応じるようにして、地下室の隅の方で、青白い光の球が、ひとつ、またひとつと、暗闇に浮かび上がるようにして現れた。その青白い光の球は、最初は空中を漂うようにゆらゆらと揺れ動いていたが、真加奈の近くに集まってくると、やがて形を成しはじめた。

「ア、ア……」

青白い球が成した形は、胎児であった。まだ生まれる前の、人としての形を成していない、小さな小さな赤ん坊だ。胎児、特に流産または人工妊娠中絶により死亡したような、生まれてあまり日のたたない子を水子と呼ぶ。それら水子の霊が、一体、また一体と、真加奈の周りに集まってきた。

彼らに向かって、真加奈が優しい声で語りかけた。

「ねえ、教えてくれないかしら。あなたたちをまだこの世に留めている理由はなに？ わたし、あなたたちを助きたいの。だから、ね、教えてちょうだい」

そう呼びかけると、水子の霊の一体が、真加奈の足にすがりつき、小さな声で言葉を発した。

「マ……マ……」

それは、声にならない、苦しげな、まるで悴り出すような音律であったが、真加奈は水子の霊の想いをしっかりと受け取った。

「そう。そうなの」

そう言うと、真加奈は微笑んで、おもむろに巫女服の胸の部分をだけさせた。それだけで窮屈な巫女服に押さえつけられていた豊かな胸が本来の大きさを思い出したかのようにはぼろんと姿を現した。地下室のひんやりとした空気の影響でか、薄桃色の乳首はツンと

立っており、冷気が肌を撫でた瞬間、身体がぶるっと震え、露になったXカップの超乳がぶるんと大きく揺れた。

しかし、真加奈は寒気などおくびにも出さず、自分の周りに集まった水子の霊たちに向かって、優しい口調で囁きかけた。

「あなたたち、寂しかったのね。こんな暗くて冷たい場所にいて、ずっとずっとお母さんの温もりを探し求めているのね」

真加奈がそう言うのと、その言葉に呼応するようにして、水子の霊たちが口を開け、「ウー」とか「アー」とかいった「声」にならない「声」を発した。

それは、肯定の意思表示であった。

彼らは欲していたのだ。餓えていたのだ。母の愛に、温もりに。それらに対する欲求が、彼ら水子の霊たちを昇天させることなくこの世に留めている原因であった。

真加奈がまた優しく微笑んだ。

「いいよ。わたしはあなたたちのお母さんじゃないけど、わたしをお母さんだと思ってくると甘えて。ぎゅって抱きしめてあげるから」

そう言うなり、側に置いてあったベッドに座り込み、手を広げる。水子の霊たちを迎え入れる姿勢をとった。

「ア、ア……」

「ウゥ、ア……」

「ア、ア……マ、マ……」

姿を現した水子の霊たちが、ゆっくりと、しかし確かな動作で、真加奈に近づき、群がりはじめた。冷たい小さな手が肌に触れ、這い昇る。彼らが目指すは母性の象徴たる真加奈の大きな乳房であった。

「アアー、アアアー……」

水子の霊が、小さな口を大きく開けて、真加奈の乳首に吸い付いた。

ちゅばっ、ちゅばっ、ちゅばっ……

湿り気を帯びた音を立てながら、真加奈の薄桃色の乳首を口に含み、吸い付き、しゃぶる。別の水子の霊も、真加奈のもう片方の超乳に辿りつくと、やはり同じように湿り気を帯びた音を立てて乳首を吸いはじめた。

ちゅばっ、ちゅばっ、ちゅばちゅばっ……

水子の霊が、一心不乱になつて真加奈の乳首を吸う。食るように吸引する。その吸う力は弱々しく、母乳も出なかったが、それでも吸いながら、真加奈に優しく頭を撫でられて、安心したのか、乳房を吸った状態で姿が透明になつてゆき、やがて朝陽を浴びた霧のように消えてしまった。

欲していた温もりと愛情、そして母性を味わって、昇天し、成仏したのである。

真加奈は優しく囁いた。

「さようなら。次は、優しいお母さんのところに生まれてきてね」

「ねえ、まだ姿を現していない子もいるんじゃない？ 大丈夫、怖くないわ。わたしを信じて姿を現して。さあ」

「ア、ア、ア……」

「ウウ……ウアア……」

(第三章..一人の徐霊士と群なす水子)

さすがの真加奈も、この混乱と混雑には焦りを覚えたらしい。水子の雪

ア
ア
ア
ア
ア
ア
・

群がる、群がる。水子の霊たちが、まるで津波

「ま、待って！ お、お願いだから、落ち着いてッ！ 大丈夫だから……ッ、じゃ、順番に、順番に……ッ！」

「マアアアアアアアアアアッッッ！」

「い、痛いッ、痛い痛いイタイッ！　だ、だめッ、やめてッ！　引つ張らないでッ！　お、願いだからッ、やめてえええええッッ！」

暴走をはじめた数十体の水子の霊にもみくちゃにされて、真加奈の声が、沈着冷静な声から悲痛なモノにとって変わった。

ぎゅっ、ぎゅうっ、ぎゅううううう……っ！

「うからあああああッッッ！」

女性の非力では太刀打ちできないほどに

えええええツツ！ た、助けてツ、誰かツ、誰か助けてえええええーツツツ！」

しまったため、誰にも聞こえるわけがなかった。

そして、叫び続ける真加奈にとって、事態はさらに悪化を続けた。

他の水子たちと同様に真加奈争奪戦に加わるのであった。

し
し
し
し
し
し
ー
ツ
ツ
ツ
！
し

すの霊たちはますます数を増やしてゆく

「アー、アー、アー……」

「マア、マア、マア……」

その数たるや數百體を超え、地下室を埋め尽くす勢いた

えええええーッッッ！

水子の霊たちにもみくくちにされながら、その美しい顔面に恐怖の色を一杯称えて、

「た、助けてッ、痛ッ、痛いッ、だ、誰か……ッ！お願いッ、誰かッ、助けてええええええええええーッツツ！」

「助けて……ッ、お願いッ、誰か助けてッ！ 誰かあああああ——！」
真加奈はいま必死だった。水子の群れに襲われて、埋もれ、溺れ、身体をむちやくちや

水子の霊たちは敏感である。彼らは、自分たちを呼びだした真加奈が、もはや愛情を持つて接していないことに気づいており、最初は当惑し、そして徐々に怒気を帯び始めてい

これは危険な兆候であつた。

「いやあああああッ！ いや、いやッ！ いやあああああッッ！ お願ひッ、やめてッ、助けてッ！ 同時にはむり、みんな一緒には無理ッ！ こ、壊れるッ、壊れちゃう

無事だったのは、彼らが無意識のうちに手加減を加えていたからだ。壊さないようにして

水子の霊たちは、真加奈が自分たちを拒絶し、嫌ったことをはっきりと認識したのだ。その瞬間、地下室が、膨大な量の怒気で満たされた。

「アア、アアアアアアアアアアアアアアアア！」

もはや「ママ」という単語が断片的にすら聞かれなくなった。それは、水子の霊たちが、

求め、貪るために、真加奈に対して襲いかかった。



（第四章・子宮。温もりの住処をついに発見した水子）

水子の霊の一体が、真加奈の貝のようにびたりと閉じた秘部に手を伸ばした。そして、冷たい小さな手で、マン肉を掴んだのである。

「あッ、ダ、ダメッ、そこはッ、だー」

ぐばあああああ……

「い、いやああアアアアアッ！」

マン肉が左右に開け拡げられて、薄っすらと膜が張った状態の秘穴が露になる。まだ異性を受け入れたことがないだけでなく、自慰行為すらおこなったことがない綺麗な状態の穴がだ。

「アアウアア……」

その乳首のように綺麗な色をした肉穴を見て、マン肉を開け拡げた水子の顔に、薄っすらと笑みが浮かんだ。肉欲にギラつく欲望に満ちた男のような笑みではなく、心底嬉しそうな笑みであった。まるで、かつて自分が居た「住処」を見つけた動物のような、そんな笑みであった。

「アア、アアアア……」

マン肉を拡げた水子の霊が、嬉しそうな声を上げながら、ぐいつと前へと身を乗り出す。そして、頭を真加奈の処女穴に押しつけた。

当然、真加奈は驚いた。

自分の下腹部に生じた異変に気づいて、そして目で見て確認して、彼女は自分の身にかけていることを理解して悲鳴を上げた。

「なっ、何っ……頭を押し付けて何をしようとしているのッ！待ってッ！違うッ、そこはダメッ！そ、そこはッ、入っちゃー……ッッッ！」

ずぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶ……ッ！

「いざやあああああああああッッッ！」

水子の霊が真加奈の処女膜をぶち破り、その秘穴の中に大きな頭を押し込ませた瞬間、真加奈の身体が大きく跳ね、その口から絶叫がほとばしった。

「ひざやあああああああッッッ！だめ……ッ、そこは……ダメッ、そこはッ、そこにはッ、入る場所じゃないいいいいいいッッッッ！」

ずぶ、ずぶ、ずぶぶぶぶぶぶ……ッ！

ダメだと必死に訴えても、水子の霊は聞く耳を持たない。開け拡げた日穴の中に頭を突っ込み、破れた純血で濡れた小さな身体を、ぐいぐいと真加奈の膣穴の中へと押し込んでゆく。小さな手を使い、膣肉を掻き分けながら、奥へ奥へと入ってゆく。そのつど、真加奈の下腹部が、まるで一種の生き物のように凸凹と膨らみ、波打つように隆起した。

「ぐざいいいいいいッ……！ざいいッ、イギッ、ぐざやあああああッッッ！」

最初のうちは歯を食いしばり、目を大きく見開いて、涙を流しながら必死になつて耐えていた真加奈だったが、侵入した水子の霊が子宮口の拡張に取り掛かった瞬間、我慢の堤

が決壊した。

「だ、ダメええええええええええッ！　そ、そッ、そこはッ、入っちゃー！」

——ダメええええッッ！

と叫びたかったに違いない。

しかし——。



ず、ぶううううう……ッ！

「うぎゃああああああああッッッ！」

口からほとばしったのは、ケダモノのような絶叫であった。

真加奈の膈内に侵入した水子の霊は、その頭をで子宮口に押し付けると、まるで懐かしの我が家に帰ってきたかの様に、小さな子宮口から頭をねじり込み侵入し始めた。

「ぐッッッッッ！ざいいいいいいッ！な……な……な……何をおおお……ッッッ！」

そして、真加奈が状況を理解できず、混乱の極みに達する中、水子の霊は子宮の中に、その身を潜り込ませたのである。真加奈の腹が一瞬にして妊婦のようなポテ腹になった。

「ぐげええええええ……ッ！うえッ、げッ、ぐうううううう……ッ！」

異物侵入による子宮の膨張に伴って、胃が圧迫されてその内容物が逆流して口からゲボと漏れ溢れた。真加奈の腫はぐると上を剥いて白くなっており、流れる涙が鼻水や吐瀉物と交じり合ってびちゃびちゃと床に垂れ流れる。相当、苦しいだろう。肩が激しく上下しており、その呼吸は、速く、短く、そして荒かった。

「はっ、はひひひひ……ッ！くっ、苦しいッ、ぐ……ぐ……苦しい……ッッッ！

お腹が……ッッッ！私のおなかがあああああッッッ！



「ゼーゼーと荒く息を吐きながら、それでもどうにか気持ちと身体の動揺を落ち着けようと、不規則な深呼吸を繰り返す。どうやらまだ、精神的にも肉体的にも耐えられる状態のようだが、地獄は、まだほんの始まりに過ぎなかった。」

「アー、アアアアアー」

「ウウウウウ……、ウアアアアアアー！」

水子の霊の一体が真加奈の胎内に入ったのを目にして、他の水子の霊たちが触発されたように動きたした。

動く。蠢き、動く。水子の霊たちが、群れが、大群が、真加奈の秘穴を目指して、ぞろぞろと動きたした。

それに気づいて、真加奈の口から驚愕と動揺の言葉が漏れ響き、ほとばしった。

「ひッ！ はひッ、う、嘘ッ、え、えッ！ う：嘘ッ！ えッ、ま：待つてッ、嘘ッ、嘘ッ、そウソおおおおおッ！ や、やめてッ、みんな何してるのッッ！ 私の子宮はみんなで入れる場所じゃないわあああああ——ッッ！ お願ひッ、待つてッ！ ちよつと待つてええええええええええッッッ！」

必死の懇願が地下室内に響き渡る。これから自分の身に起ころうとしている事態を想像して、真加奈は心の底から震えあがった。



(第五章…水子の群れは温もりを求めて胎へと還る)

「やめてッ、お願いだからッ！　むりッ、ぜ…絶対むりだからああッッッ！　お願いッ！　やめてッ！　やめてええええええええッッッ！」

哀れみに満ちた懇願は、はつきり言って、無駄だった。

グバァァァァァァァァ……ッ。

「ぐぎぎあああああああああッッッ！」

真加奈の膈穴に群がった水子の霊たちが、我先に膈穴に入り込もうとした結果、プチプチと、マン肉の筋が切れる音が響いて、つい先ほどまで処女だった真加奈のマ○コは、真加奈の秘穴はまるで成人を出産したがごとく拡張された。

「ぐげえええええええええ！　ぐえッ、げッ、ぐがあああああああッッッ！」

水子の霊は、個々であればそれほど大きくはない。しかし、集まれば、人間の大人並みの大きさになる。そのことを思い知って、真加奈の口からは、ケダモノの断末魔のような咆哮がほとばしり、絶望に満ちた叫び声が地下室内に響き渡った。

「があッ、うがッ、がああああああッッッ！　赤ちゃんたちが……ッ！　たくさん

の赤ちゃんたちが、みんなで私の子宮に還りたがってるうううううう！　わッ…私の子宮があああああッ！　私の子宮が壊れるうううううッッ！　壊れちゃうよおおおおお！　溢れて…ッ！　弾けちゃうううう！」

ギチギチギチイイ……ッ

「ぐぎいいいい！　みんなッッ、みんなが一斉に私に入ろうとしてるのとおおおおお！　ッッ！　みんなが入ってくるうううううう！」

「私の大切な場所が爆発しちゃううううッッッ！　ごわれちゃうッッ！　裂けちゃうよおおおおおッッッ！」

もはや最初に抱いていた母性や慈愛の心など霧散してしまったようで、狂ったように声を上げ、泣き叫ぶ真加奈。もし四肢や身体が自由であったなら、悶え狂つてのたちまわっていたに違いないが、彼女の身体を囲む水子の大群がそれを許さなかった。

そして、悪夢が開始された。

ずぶ、ずぶぶぶぶ、ずぶぶぶぶぶぶ……ッ！

「ぐがああああああッッッ！　もう無理いいいいッ、限界いいいい！　もう満杯ッ！　パンクするッッ！　定員オーバー！　よおおおおおッ！」

真加奈の口から、最大ボリュームの発狂音声がほとばしり、地下室内に響き渡った。水子の霊たちの侵入が始まったのだ。

ずぶ、ずぶぶぶ、ずぶぶぶぶぶぶ……ッッッ！

何体もの水子の霊たちが、真加奈の膈穴の中に頭を入れ、身を潜り込ませて、我先にと競い合うように、入ってゆく。侵入してゆく。奥へ、奥へと、かつての懐かしい記憶を頼りに、どんどんと奥へと入ってゆく。子宮を指し、侵入してゆく。



その結果、真加奈の腹部が、まるで破裂寸前の風船のように大きく膨張し、とんでもないほどの超巨大なボテ腹と化してしまった。

「ぐぎゃあああああッッッ！　む、むりッ、むり無理ムリッ！　ムリだからあああああああッッッ！　私……ひとりでは……ッッッ、ひとりであなたたちみんなのおかあさんになんてなれないからあああああ！」

「前提が……ッ！　無理……ッ！　最……初……っから……出来ないのッ！　わかつてえええええええーッッッ！　入らないのッッ！　入らないからッッ！　入りきらないからあああッッ！　みんなまとめては受け入れられないいいいいいい！　ぎぎいいいい……ッ！」

「お、お願い……ッ、だから……ッ、後生だから……ッッ！　わかつて……ッ！　入ってッ、ごないでえええええええッッッ！」

真加奈の口からほとばしる叫び声は絶望に満ちていた。

それは死の咆哮だった。

しかし、水子の霊たちは気に止める様子もなく、止まる気配もなかった。

ずぶう、ずぶぶぶ、ずぶぶぶぶうううう……ッッッ！

「うぎゃあああああッッッ！　パンクしちゃうううッ！　私のおながパンクしちゃううよおおおおおおお！」

それでも入ってゆく。入ってゆく。どんどん入ってゆく。侵入してゆく。水子の霊たちが、群れとなって、我先にと競い合うように、真加奈の胎内を目指して、入り込み、ねじり込んでゆく。それは既に完全に定員オーバーの満員電車に、あとちょっと……まだいける……何とか……と当に容量限界の器に、どうにか体を押し込んでいく人たちを連想させた。

一〇体、二〇体、三〇体……いや、もっと、もっと。手の平サイズの霊から普通の赤ん坊の大きさのモノまで、数十体もの水子の霊が、真加奈の子宮の中に入ってしまったのだ。その結果、真加奈の腹は大きく膨らみ、超巨大なボテ腹と化してしまった。その大きさを凌駕し、まるで夏季キャンプ用のテントのような大きさだ。成人した人間が数人詰まっていると言っても、誰もが信じてしまうであろう。

「(息音…ハアハア)……ぐえッ、げ……(ハア)がふッ、ぐうげえ……(ハアハアハア)お願いッ……こッ、これ以上は……(ハアハア)本当にッ！　裂けちゃううううううううううう！」

ギチ……ギチギチ……ギチギチギチイイ……ッ
「ぐぎいいいいいいッ！」

瀕死の状態——とは、まさにこの状態を指して言うのかも知れない。腹に空気を注入されたカエルのように膨らませた状態で、白目を剥き、時おりびくんびくんと身体を痙攣させながら、口からブクブクと泡を噴いている真加奈はいま、まさに死の危機に瀕した状態にあった。その大きく開け拡がったマンコには、入りそびれた水子の霊が群がっているだけでなく、何体もの水子の霊の手足がはみ出た状態にあり、一向に閉じる気配がなかった。

超巨大に膨張した真加奈の腹が、ぼこんぼこんと動いている。胎の中に詰まっている水子の霊たちが、心地よい居場所を求めて動いているのだ。しかし、満員電車以上の圧迫に苛まれて、はたして居心地のよい場所を見つけないことができるのだろうか。だが、それでも、彼らはまだ幸せであつたろう。ほんのわずかとはいえ「温もり」を感じることができているのだから。真加奈の周りには、まだ数百体の水子の霊たちがいるのだ。

(第六章…満杯の胎。それでも温もりを求める水子たち)

真加奈の周りには、まだ数百体の水子の霊たちがいる。

彼らは瀕死の状態の真加奈にすがりつき、抱きつき、乳房を揉んで、乳首を吸っているが、それでは到底満たされるはずがない。そして、自分たちを呼びだしておいて、一向に「愛」を注いでくれない真加奈に対して、さらなる怒りを募らせていた。

「アアアアアアアア！」

「アアアアアアアアアア！」

まるで地の底から聞こえてくる呻き声を発しながら、水子の霊たちが、さらなる暴走を始めて真加奈に襲いかかった。

彼らは少しでも温もりを得るべく、真加奈の「中」へと入ろうと試みた。

そこはもはや「穴」であれば何処でもよかったようだ。

メリッ、メリメリメリメリメリ……ッ！

「がぎやあああああああッッッ！」

肛門が無理やり拡張されて、真加奈の身体が大きく跳ねた。水子の霊たちによる仕業だ。彼らは真加奈の「中」へと入るべく、肛門からも潜り込み始めたのである。

「ち、ちがッ、そゾゴはッ、違——ッッッ！ 入るッ、場所じや——ッッッ！」

息も絶え絶えに、必死になつて訴える真加奈。

メリッ、メリメリ……ミチミチギチギチイイ……ッ！

「うぎッ……うぎぎいいいい——ッッ！ぐるじいいいいッ、ぐるちいいいいッ！おッ、お尻からも入つてきたあああああああ！」

既に子宮からの侵入で一分の隙間もなく水子は膣穴に入り込んでおり、真加奈の腹はドームのように膨らんでいたが、それにも飽き足らず肛門から入った水子の霊たちは、今度は尻穴から「中」へと滑り込む魂胆のようで、既に破裂寸前で限界の真加奈の身体へ、今度は尻穴から強引にその身を潜り込ませはじめた。

ギチギチイイミチミチミチ……ッ！

ミチギチイイイイ……ッッ！

内臓が凄まじいほどの激痛を発し、それがそのまま真加奈の口から死の咆哮となつて勢いよく飛び出した。

「ぐギャあああああッッッ！ お、重いッ！重いいいいい！赤ちゃんたちに潰されちやうううううッッ！ つ、潰れりゅッ！破裂しゅりゅうううう！ 子宮がッ、内

臓がツツ、パンクしちゃうよおおおッ！もう死ぬうッ！死ぬ、死ヌツ、死んじやうううううッ！ やめてえええええッ！お、お願いだからッ、わだじのナガがらッ、でデッでええええええええええッ！」

苦しみに満ちた咆哮を発しながら、涙や涎、鼻水、吐瀉物でぐちゃぐちゃになった顔面を狂ったように振り乱す真加奈。しかし、そんな無惨な叫び声を聞いても、水子の霊たちは侵入を止めようとはしなかった。拡張した尻穴から、あるいは開け広げた臍穴から、その身を潜り込ませて、どんどんと奥へと入ってゆく。侵入してゆくのだ。

ギチギチギチ……ミチミチミチミチミチイイ……ッ！

「ぐざざいいいいい！ああああああ！もう無理！もう無理いいいいい！限界ッ！満杯なのッ！入らないのよおおおッ！」

「ミシミシ言ってるの……ッ！身体がツツ！がッ！もうッ！これ以上はッ！身体が爆発しちゃううううッ！破裂しゅりゅううう……ッ！」

既に限界であった子宮に加え、肛門からも水子を受け入れ続けた加奈子の腹は、当の昔に限界を超えて伸び切り、少し触っただけで水子が溢れ出して来そうな程、破裂寸前の状態にあった。



しかし、それでもまだ、水子の霊はたくさんいるのだ。大小合わせて数百体はいるのだ。いま、真加奈の「中」に侵入した水子の霊が「〇〇体だとしても、その数倍の水子の霊が外で待機しているのだ。そして、彼らもまた「温もり」を欲していた。

では、彼らは何をするだろうか。

当然のことながら「温もり」を求めて、真加奈の中へと入ろうとする。

では、どこから？

（第七章…既に限界のきしむ身体。それでも水子は還りたい）

「アアアアアアアアアア……」

「アアアアアアアアアア……」

ブチィ、ブチブチブチブチィィィィィィィィィィ……

「びざあやあああああああッッッ！な、何ッッ！今度は何なのおおおッ！？」

水子の霊たちが、新たな侵入場所を求めて、乳穴の拡張に取り掛かった。針の先ほどの小さな穴に指を突っ込み、無理やり裂き拡げる。肉が、筋が、皮膚が引き千切れる音がして、乳房の先端に赤ん坊の腕なら入りそうなほどの穴が出現した。

その穴の中に、水子の霊が侵入を始めたのだ。

ずぶっ、ずぶぶっ、ずぶぶぶぶぶぶぶ……ッ！

「ぐざざいいいいいい！むッ、胸にも赤ちゃんがああああ！死ぬッ！死んじやううううッッ！」

入る。入る。入ってゆく。水子の霊たちが、真加奈の大きな乳房の中に、乳腺を引き裂き、極き分け、拡張しながら、身を潜り込ませてゆく。その結果、元々Xカップと超乳だった真加奈の乳房が、ありえないほどの膨張を遂げ、まるで人間が入っているのではないかと錯覚してしまうほどの大きさへと膨張を遂げたのだ。青白い血管が浮き上がっているその表面は、侵入した水子たちの手足が浮かび上がっており、デコボコと痛々しかった。

「ぐうッ、げ、ええええええええええ……ッッッ！こッ……壊れちゃうッ……本当にッッ……も……もう……む……無理……」

ここで、ついに真加奈の意識が途切れた。自分の胸の中で、身体の中で、暴れ狂う「〇〇体を超える水子たちの胎動を感じながら、意識を失い、白目を剥いた。

水子の霊たちは、そんな真加奈の口からも侵入しようとし、身を潜り込ませた。

ずぶ、ずぶ、ずぶぶぶぶぶぶぶ……

と、湿り気を帯びたおぞましい音を響かせながら。



かくして真加奈の身体は水子たちの「巢」となった。水子たちの侵入に伴って、真加奈の腹や乳房は水死体を彷彿とさせるほど巨大に膨らみ上がり、その穴という穴からは、ギチギチに詰まった水子たちの手や足、そして頭などが、入りきらない状態で飛び出していた。その有り様を端から見ると、真加奈という人間は、もはや子どもの遊具にされてしまったというほか無い。

そう、遊具だ。

水子の霊たちは、真加奈という存在を、完全に玩具として認識し、扱っていた。ほんのわずかな「温もり」と「愉しみ」を与える玩具として、彼女を扱うことを決めたのだ。

ゆえに、彼らは真加奈を自分たちの領域に連れていくことを決めた。

そこでずっと甦るつもりなのだ。

愉しみ尽くすつもりなのだ。

水子の霊たちが姿を消してゆく。一体、また一体と、溶けるように、霧散するように、静かにどんどん消えてゆく。そして、それに伴って、真加奈の身体も消え去った。連れて行かれたのである。水子たちが住む「狭間」の世界へと。

「あ、が……タ、スケ……」

それが、この世での真加奈の最後の言葉であった。

（第八章…エピソード）

……数日後、水樹真加奈が失踪したというニュースが驚きをもって報じられた。テレビや新聞では、しばらくの間、その話題で持ちきりとなったが、すぐに新たなニュースが報じられると、みんな忘れていった。

真加奈失踪に伴って、和田産婦人科医院の取り壊しも白紙に戻り、開発企業も倒産して、全ては振り出しに戻った。

だが、霊感がある者が和田産婦人科医院の跡地の近くを通ると、時おり聞こえることがあるという。それは赤ちゃんの愉しげな笑い声であり、若い女の呻くような叫び声だという。その若い女は、絶望に満ちた声で、しきりに助けを求めているそうだ。

その声を聞いた者たちは、あれは中絶された胎児の声で、彼らを殺した母親の嘆きだと理解した。その方が理屈としては正しいからだ。

しかし、それが真実でないことは、誰も知らない……。